

自閉症児における日常生活スキルの指導

— 分化強化による適切な弁別の獲得3 —

An attempt to teach a daily living skill in a child with autism

An acquisition of relevant discriminations by using differential reinforcement procedure

○ 氏家千恵美・宮崎 眞

Ujiie Chiemi and Miyazaki Makoto

(盛岡みたけ支援学校・岩手大学教育学部)

(Morioka Mitake Support School・Iwate University)

Key words: Autism・Daily living skill・Differential reinforcement

目的

自閉症の子どもたちが現在将来に渡りQOLのある生活を送るためコミュニケーション行動や行動問題の課題と共に、生活スキルの育成が重要である。衣食住の生活スキルの習得は、手本や言語指示といった先行刺激や「そうだね」「ちがうね」などの社会的結果や自然な結果が適切な行動を強化し不適切な行動を弱化消去するという分化強化によると考えられる。自閉症児の学習に関して先行刺激や強化刺激の不全のため分化強化が機能しないことがあると指摘されている(Ghezzi, et al., 1999)。

本報告の対象児においても様々な生活スキルを習得している一方で、一部の生活スキルに独特のトポグラフィや随伴性を形成し社会生活において支障をもたらしている。前2回の報告では、分化強化を機能化するために他の介入手続きを加え、つまみぐい行動から適切な食事行動への行動修正と、大切な書類などを折り曲げちぎる行動の消去を行った。本報告では、学習や日常生活でクレヨンや糊などを塗る際に過度に塗るという独特な行動の修正を行った。その際、「対象児の過度に塗る行動は、クレヨンや糊を塗るという状況を先行刺激として誘発され、過度に塗られた結果より強化された行動である。何らかの手立てで適切な量の塗り行動だけを分化強化することで、行動修正できるだろう」という作業仮説を立てた。本研究の目的は、その仮説に基づく指導手続きを検討することである。

方法

1. 対象児: 200X年6月現在D養護学校4年に在籍する男児A(IQ36, MA4.0)である。制作活動で貼り絵をした際に糊の絞り出しや力強く重ね塗りをするために糊の量が過多になっていた。クレヨンやクレパスでの色ぬりも同様の重ね塗りがありクレパスなどが折れてしまうとの報告を母親から受けていた。**2. 指導目標:** ①適切な量で糊などを塗ることができる。②言語指示「もういいよ」「はい、おしまい」に従うことができる。**3. 指導期間:** 200X年5月から翌年1月の間に18セッション(以下Sと略す)実施。**4. 参加者および指導場面:** A児と指導者(以下Tと略す)1とT2が参加し、貼り絵などの制作活動を行った。机を挟みA児の正面にT1が座り材料の提示や制作の指示をおこなった。T2はA児の隣で一緒に制作。モデルとなった。**5. 手続き:** [指導期1]スティック糊を使用。**介入①:** A児が糊を塗る時にT1は「多いよ」「軽く・優しくね」と言語指示した。**介入②:** T1は糊を塗る面の外周から1cm程内側に糊しろ線を記した紙をA児に渡し、「ぐるっと周りに糊を塗ってね」と指で指し示しながら言った。[プロブ試行] 液状糊を使用。A児には介入①・②と同様の言語指示と、糊しろ線を引いた紙を渡した。[指導期2] **介入③:** 糊しろ線に〈はじめ〉と〈おわり〉の文字を書き加えた。T1はA児が適量に塗ったところで「はい、おしまい」と言語指示し、糊を入れる籠をA児に差し出した。A児は指示に従い籠に糊を置くことを求められた。**介入④:** 1本の糊をA児とT2で交互に使い、T2はA児が適量に塗ったところで「はい、次、糊を貸して下さい」と言って手を差し、A児に塗るのを止め、糊を渡すことを求めた。A児が塗り止めない場合、T2は軽くA児の手に触れ塗るのを止めた。[指導期3] 予備訓練の後介入した。**予備訓練:** クレヨンで塗られた絵カードを見せ「多い」「少ない」「ちょうどいい」の理解と言語表出を求める弁別学習をした。弁別学習終了後続けて「ちょう

どいい(適量)」の絵カードを見本にA児は色塗りをした。**介入⑤:**

クレヨンで「濃い」と「薄い」に塗られた見本の絵カードを提示し、A児は絵カードを見本にT1の指示に従い「濃く」または「薄く」色を塗ることを求められた。全ての色塗りを終わるとT1は「薄く塗ってね」と指示をし、スティック糊をA児に渡した。A児は色塗りしたカードの裏に糊を塗った。**介入⑥:** A児は「濃い」「薄い」の順で絵カードに色を塗り、「薄く」の後、カードの裏に液状糊を塗った。A児が過多に糊を塗りそうな時は「もういいよ」と声をかけ、次にT1かT2がA児の手に手を添え適量で塗り止めることにした。**6. 整理方法:** 次の基準で量を定義し糊塗りを観察・記録した。薄く全体に塗られている○(適量)、重ね塗り・絞り出しで糊の盛り上がりが見られる×(過多)。**7. 記録の信頼性:** 2名の記録者間の一致率は18/18×100=100%であった。

結果(図1)および考察

指導期1・2において、モデリング、言語プロンプト、視覚プロンプト、身体プロンプトの順で段階的に刺激プロンプトを強めていったにもかかわらず、適量の糊を塗る行動の生起率は0%であった。指導期3の予備訓練において、クレヨンで塗られた絵カードを見て「多い」「少ない」「ちょうどいい」の弁別学習をしたが、A児は全試行において正反応を生起した。その後の介入でT1の指示に従い「濃く」と「薄く」色を塗る行動を形成し、糊で「薄く」塗ることを求め、過多に糊を塗る行動は軽く手を添えて阻止(ブロッキング)すると、適量に糊を塗る行動はS16で100%に達しその後維持した。A児は薄く塗る行動を持ち合わせていなかったため、「濃い」と「薄い」の弁別を促し「薄く」塗る行動を形成したことと、自己強化的な行動は反応をブロッキングしたことで指示に従い適量を塗る行動が強化され、不適切な行動は強化されなくなり適切な行動が習得されたと考える。

嫌悪的な手続きを使わず分化強化を促すためには課題や対象児の特徴に応じ、物理的環境や教示を工夫し手がかり刺激を整えること、自己充足的な不適切な行動は物理的に阻止し消去することで適切な行動が強化され、不適切な行動が強化されなくなることが必要であった。薄く塗る行動の般化が、A児が通うピアノ教室で音符の色塗りが薄くなり、はみ出さなくなったことに見られる。また、指導場面以外でA児に飲み物を注いでもらう際「少しでもちょうだい」と言うときのコップの半分以下に注ぐようになった様子から、塗る量の「多い(濃い)・少ない(薄い)」以外の量の概念への波及の可能性が伺える。

図1 適量に糊を塗る行動の生起率

